

笑 い 菓

モーレンカンブふゆこ

箸が転がってもおかしい年頃というものがある。しかし私は当年四十七歳。一見陰気でやせっぽちで劣等感にうちのめされたような風貌だったくせに、今だに箸が転がってもおかしいのである。

少女時代は悲しかった。家は嫌なことばかりなので、学校では一日中笑っていた。澄子さんという、あまり友だちのいない、しかし実によく笑う女の子と、いつも一緒だった。劇を見ている最中、登場人物のバンドがバンソウコウに見えると言って笑うのである。笑いだすと止まらない。下校後は彼女の部屋にこもって物真似をする。あの猫背の級長がマインボを踊ったらどうなるか。踊り出すと話が思わぬ方に展開する。卒業後ずうっと後に、

彼女が韓国人だったということを知って、びっくりした。彼女のお父さんもお母さんも、口数は少なかったが流暢な日本語を話したし、彼女自身もそれらしい事は一言も言わなかった。しかしお兄さんが就職せずにも家にいたことや、ほったの落ちそうなおいしいピーマンのお煮つけなどをごちそうになったことなどを考え合わせて、そうかもしれないと思う。こうして私自身異国で子供を育てるはめになって、時々彼女のことをなつかしく思い出す。彼女を思う時今だに切なく思うのは、彼女が韓国人だったということではなくて、私がそれに全然気がつかなかった、ということだ。彼女たちに異質なものを感じなかった。こうして人種のるつぼのような小国に身を寄せてみて、つくづくと哀しい日本ではある。

高校時代おもしろい歴史の先生がいた。一時間お腹をケイレンさせっぱなし、というのだから大変な天才である。彼が空をみつめて一瞬沈黙するその「間」がたまらない。

「野武士というのはですねえすごかったです。ひとすじなわどころではないです。残酷も残酷、土の中に体を埋めてですねえ首をのこぎりでぎいぎいやられても、ちっとも死なんですな。(そしてふき出しそうなのをこらえながら)そこで私達は次の言葉が爆笑をさそうのを知るのだが)死んでもですねえ、まあんだ生きとるですワ。」(笑)

「戦争が終わり頃になると、何もなかったですねえ。竹やりの竹もなくなって、みんな爪をのばせよ、と言った。アメリカ軍が上陸したら顔をひっかけ、ゆうてですね。

……来ましたね、ついに、アメリカ軍。(一瞬間をおいて) 原子爆弾ちゅうのもって」お腹をよじらせて笑っているうちに涙がこみ上げてきて、とうとう私はこの人に初恋をしようことになる。

異国に住んで一番つらかったのは、笑えなかったということだ。日本人のひとりも居ない田舎で十二年、二児を育てた。それが忘れもしないあの日、仲良しのマリータさん夫婦とネレケさん夫婦と誕生パーティーをしていた時だ。私はふと、「ねえインスピレーションというゲームをしてみない？」と言ってみた。このゲームは学生時代女友だちとこたつに入っていたゲームで、郷愁にさいなまれる私にとっては幸福のシンボルのようなゲームだった。二組みに別れて一方が題を出す。他方はその題に対するインスピレーションを書き、誰が書いたかをあてるのである。夫側と妻側に別れて真剣な題が出た。「サラリー」と夫組が出す。「子ども」と妻側。「セックス」と夫組、「幸福」と妻側。私はプロウクンのオランダ語を書いてマリータさんにわたすと彼女が直して発表してくれる。夫組から「女性解放」という題が出たときである。マリータさんは真剣な顔をつくらって、自分のをまずこようよみあげたのである。「Oオ(感嘆詞、あら、という意味) O、O、O、O、O、O、O」彼女はこのオーオーとの間に間を置き、一字ずつ抑揚をつけて「OノOノOノO、O、O、OノO」ノとよんだのである。部屋は爆笑。私はもうおかしくて椅子から転げ落ちて笑った。この時突然私の囲りをぐるっととりまいていた目にみえない頑丈な壁が一部

裂けて、そこから涼しい風がふつと額を吹いたように思えた。

そうだ、あれからずい分暮らしやすくなった。マリータ家は、やつと十年待って生まれた赤ちゃんが八か月で心臓の手術の失敗で死んでしまつて、いつも重苦しい空気につつまれていたのだが、二度目に懐妊したという報が入つて、私達はすぐお祝いに行った。彼女のぞうきんの大きな穴をみて、「あら、この穴、ぞうきんより大きい」と私が言えば、「もつとあるよ」と彼女は穴のあいたタオルや、穴で指なんかなくなつてしまつたくつ下や、はてさてぱっくりあいたくつままで出してきて、二人で台所のゆかにうづくまつて笑つた。あれからマリータさんは三人子を産んだ。「三人目」と名づけた子は、ダウン症の子だった。病院にかけた私の首に、大きなマリータさんがすがつて「助けて」と息をつまらせた。私はとっさに、「今（次女の）シリキーちゃんに会つて来たわよ。『フユコ』って上手に発音したわ」と言うと彼女はすぐ顔をほころばせて、「ほんとう？　そうでしょ。上手でしょ。それから何て言った？」と言いながら、腕をはなした。彼女は何かにすがるようによく笑つた。彼女が下を向いて目を閉じ、手を額にかざして肩をこぎざみに震わせ、クッククックと笑うだけで、私達はみんな幸福な気持ちになるのだった。しかしその笑いが長くとだえている。

オランダ語で笑えるようになろうとは、夢にも思わなかつた。先日はある漫談家の芸能三十年記念がテレビであつた。彼は溢れる笑顔で歌い踊り、いろいろシーンを演じて笑わ

せるのだが、この善意に満ちた陽気な彼が、いこじなひがみ屋を演ずる時は痛快である。

(ニコニコした顔をふとしかめて)「プレゼントなんて嫌なこった。大嫌いさ。子供の頃からプレゼントなんて、もらったことはない。あのサンタ・ニコラスのお祭り。(十二月五日、子供達のクリスマス)嫌ですわね。友だちはおもちゃの汽車なんかもらって、ゆかの上をポーポーと走らせている。うちじゃ私が汽車くるまにならなきゃならなかった。ゆかの上をはいずりまわって。(笑)兄弟姉妹が多かったから、何とか汽車のかっこうはついたけど。(笑)一人だったら汽車とはいえないところだった。(笑)機関車だけの汽車なんて。

(笑)毎日靴をだんろの前に並べましたね。(朝プレゼントがはいっている)朝おきて靴がちやんとあった時はほっとした。(笑)当日はニコラスさんが来るっていうんで待ってたら、やってきたのが何と横丁のカフェのおじさん。(笑)ガウンをはおっているの、どこかでみたことがあると思ったら、テーブルかけですよ。(笑)背中に灰皿の跡がくつきりついている。(笑)……

私はお腹をよじらせて笑いながら、ふと父のことを思う。彼は話を聞いている限り、おもしろい人と思われていた。彼の話は大ききでフィクションが混じっていたから、側で何度も聞かされる家の者は嫌で仕方なかったのだが。父を嫌っていた母も、そういえばけっこう笑っていた。私は父と一切の絆を絶ちたいと思っていたのだから、私の笑い上戸が父ゆずりなどは、死んでも認めたくなかったのだが、こうして笑いをとりもどしたのだけ

ら、良しとしよう。父は「笑い葉」という貴重な妙薬を遺して、罪滅ぼしをしていったのだと。

「野武士肝死んでもまあんだ生きとるぞ」と勢いし人も今は野の花

(歌人・アムステルダム補習校)

